

血統登録制度化の契機

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

兵庫県政150周年の横断幕を見て、今年、県共進会が100回を迎えることを思い出した。県共進会は県内各地の予選を勝ち抜いた但馬牛の精銳が一堂に会して競う場だ。その第1回で事件が起つた。明治時代、政府は欧米の文を取り入れて近代化を進め、牛も欧米の品種で改良すべきと盛んに奨励した。明治35(1902)年、兵庫県は但馬牛をブラウンスイス種で改良すると決め、翌年から種雄牛の輸入を始めた。ブラウンスイスは『アルプスの少女ハイジ』に出てくる牛で、乳搾りにも、使役にも、肉用にも使われた。ブラウンスイスは大きく、高く売れたのでブームとなり、先祖伝来の田地山林まで抵当に入れて雑種を買った。共進会の審査長は国を拒否した。

當時、共進会の審査長は高した出品者らがこん棒や手信号で武藤審査長を追い回すおので、武藤審査長を追い回す大荒れの共進会となつた。この頃には、ブラウンスイス種は使役でも、肉用でも但馬牛より劣っていることが分か

買った人もいた。そんな明治42(1909)年に、県共進会は始まった。事件は、関西連合実業大会での松岡康毅農商務大臣の「兵庫県の北部の如きは時好によつてほしいままに牛種の変更をする傾向にあるは殊に考慮を要すべき」という訓示に端を発した。これを聞いた服部三知事は、「ブラウンスイスの輸入は兵庫県が勝手に決めたのではない。農商務大臣が、農商務省が定めた種牛を公開の席上で攻撃するとは、はなはだ以てけしからん」と憤慨

した。内務部長を農商務省に怒鳴りこませ、この訓示を起草した望月瀧三氏の審査長派遣を拒否した。

信平審査長は純粹但馬牛を手にヤンピオンに選び、これに激高した出品者らがこん棒や手信号で武藤審査長を追い回すおので、武藤審査長を追い回す大荒れの共進会となつた。この頃には、ブラウンスイス種は使役でも、肉用でも但馬牛の血統登録が制度化し、大正7(1918)年には但馬大正10(1921)年には県内

に広がつて但馬種となつた。この一連の騒動は300戸に及ぶ倒産や一家離散という悲劇を生んだ。この衝撃は大きく、「但馬牛による但馬牛の改良」が兵庫県の国是となつた。昭和19(1944)年に但馬牛を含めた全国の和牛は黒毛和種となるが、兵庫県では今も他県の血統を交えず、但馬牛だけで改良し、但馬種の状態を維持している。そのため淡路や丹波で生まれた牛も但馬牛という。但馬牛の但馬牛は生まれた場所ではなく、但馬種の但馬牛なのだ。

県共進会は但馬牛の歴史の積み重ねでもある。その歴史の中には幾多のピンチがあるが、それをチャンスに変えたから今があるようだ。そんな人々の努力がいっぱい詰まつた「第100回兵庫県畜産共進会」が10月に神戸のフルーツフラワーパークで開かれます。整理が始まつた。そして大正7(1918)年には但馬大正10(1921)年には県内



★32★



但馬牛の歴史の積み重ねでもある県共進会。今年100回の節目を迎える